

新田次郎

蒼氷・強力伝

新田次郎全集

1

新潮社版

蒼氷・強力伝

蒼氷・強力伝  
そうひょう こうりきでん

新田次郎全集第一卷

昭和四十九年六月二十五日発行  
昭和五十三年六月二十五日九刷

定価 一〇〇円

著者 新田次郎  
にったじろう

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

東京都新宿区矢来町七十一番162 振替東京四一八〇八  
電話 業務部 03(266)五一二 編集部(266)五四二

印刷 株式会社金羊社

製本 神田 加藤製本

© Jiro Nitta, 1974, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

## 目次

|         |     |
|---------|-----|
| 蒼       | 5   |
| 氷       |     |
| *       |     |
| 強力伝     | 123 |
| 凍傷      | 151 |
| 吉田の馬六   | 193 |
| 殉職      | 215 |
| 風雪の北鎌尾根 | 229 |
| 新雪なだれ   | 253 |
| 赤い雪崩    | 269 |
| まぼろしの雷鳥 | 297 |
| 春富士遭難   | 327 |
| 解題      | 350 |



蒼氷・強力伝



蒼

氷



守屋紫郎は、富士山頂観測所の狭い部屋のベッドの中で、暴風雪の音を聞きながら、日記を書いていた。

風の音は二様に鳴っていた。富士山頂の巖頭に衝突して起す轟音と、観測所の遙か上空のあたりで作り出される鞭をふるような音である。風の呼吸と呼吸との間にしばらく続く間隙があると、その後には必ず襲って来る突風が、瞬間的にその付近の空気を引攫って行く。その真空状態に向って、守屋の肉体に潜んでいる大気の圧力はバランスを要求する。その度に守屋は鼓膜に起る痛みを感じて眼をつむって堪えねばならない。ほんの瞬間ではあったが、両眼の間に針先を擬せられたような気持だった。気圧の差に引かれて、ドアーがかたりと音を立てた。

外はそれ程の暴風雪であるのに、観測所の中は静かだった。観測所員は寝ていた。風速計の自記装置だけが、カチカチと性急な音を立てている。器械の音から守屋は、瞬間風速は三十メートル以上だと思った。突風のはげしいせめ合いがすむと、風の強さは一定になった。

(馴れるということは恐ろしいことだ。吾々科学者は現象に馴れるべきではない)

守屋はそこまで書いてペンを置いた。吐く息が白い。枕カバーに吹きつける息が凝結して薄い湿った膜を作っていた。彼は日記を閉じて電灯を消した。彼は眠りつく前の時間を、寝たまま外側に傾斜している二重ガラス窓を透して星を見ることにしていた。星が窓の端から端に位置を変え、る迄に眠りつく。それまでの時間が一日のうちで最も楽しい時間であるのだが、吹雪に荒れている夜は、日記をつけたら、ちとこまって眼をつむるより法がなかった。

多様に唸り合う風には多様に応ずる共鳴がある。山頂全体が創作する咆哮に対して、富士山頂観測所足下の噴火口は共鳴した。それは限りなく深いところから湧き上ってくる慟哭のように長い周期を持って続いていた。

音がした。風とは関係のない、窓のあたりに何か衝突した音だった。守屋は頭で考えられるものを一応考えてみる。見当はつかなかったが、気象測器類の故障だとすれば、手取り早い処置を取らねばならないと思った。やっと温まった身体に再び防寒具をつけると、枕元の提電灯を取って、ベッドを下りて中央の広間に出た。測器類はすべて順調に激しい風を自記している。

守屋が再びベッドに入って天井を向くと、何かが屋根に

這い上るような音がした。続いて屋根の上を滑り落ちる音がした。

守屋は起き上って、すぐ隣室に寝ている強力（ごうりき）の小宮正作の部屋をノックした。

「小宮君、起きてくれ、変な音がするんだ」

守屋は防寒具をつけ、ベッドの下のアイゼンとピッケルを持って廊下に出た。

ザイルで身体を結び合った守屋と小宮は注意深く観測所の外壁にそって進んでいった。風に対する不自然な突起物である観測所に対して、容赦なく風が攻め立てていた。瞬間的な風陰が出来たり、雪の渦動が出来ていた。一方の風圧をこらえていると、不意に逆風に胸を突かれた。

守屋の部屋の外は窓から屋根にかけて雪の吹き溜りのスロープが出来ていた。その中に黒いものがじっとしている。

提電灯を向けるとウィンドヤッケを着た人間が雪の中にうずくまっていた。声をかけたが返事がない。向けた提電灯の光にかすかに首を上げただけだった。肩を押すと、くずれるように雪の中に倒れて、頭だけはしきりに持ち上げようとしていた。ピッケルをしっかりと握っていた。

小宮が男の脇の下に手を入れて抱え起して、提電灯を顔の真正面に向けると、呻うなくような声と共に光を払いのけようと手を振った。どっと吹き寄せて来る吹雪に抱き合った

ままの二人がよろめく。寄せ合った力が解けると、男は棒のように倒れた。

小宮の肩に担がれた男は観測所の中央広間の電灯の下に連れて来られても口が利けなかった。眼は閉じたままだった。アイゼンの片方とルックザックを失くしていた。雪眼鏡の中に雪がたまっていて、眼鏡を除くと、ばさりと雪の塊が落ちた。ピッケルは握りしめたまま、なかなか離そうとしないので、小宮が一本ずつ指を離してやった。男は殆ど意識を喪失していたが、抱き起して首を持ち上げてやると、うつろな眼を開いて、すぐぐりと首を垂れる。それでも、ブランデーのコップを口に持っていくと、飲むだけの元気はまだ残っていた。守屋は遭難者の首を抱きかえるようにして耳元で叫んだ。

「ひとりですか、あなた一人ですか……」

すると男は、遠い記憶の片隅から魂を呼び返されたかのように、初めて意識を持った顔を上げた。ぞっとするよう  
に青い顔であった。

防寒具が完全であったために、男は凍傷からは免れていた。

ストーブの消えている広間の中へ凍った風が吹き込んでいた。

「僕のベッドに寝かせよう、今迄寝ていたんだから、まだ

温かいに違いない……」

守屋は主任の窪沢くぼさわに同意を求めた。

風は一定の速度に変わりつつあった。風の強さと方向が絶えず変化している間はその生長期にあったが、一定な強さと方向になってくると、やがて治まることは分っていた。

守屋は自分のベッドに眠っている遭難者に眼を向けた。運のいい男だと思った。彼の登って来た方向が、ほんの一メートル数十センチだけ北の方へそれていたら、噴火口へ落ちていただろう。自分がもう数分早く日記帳をとじたら、彼は観測所の窓の外でおそらく凍死しただろう。彼が生きていたのは偶然でしかない。吹雪になってから、頂上観測所へたどりつくまでの十時間の間、男のたどった道は分らないが、単独行を敢えてした男だけあって、装具はかなりしっかりしたものを付けていた。

遭難者はベッドの中で時々うめき声を上げて、身体を反転した。その度に、かけてある布団がずり落ちそうになる。守屋は中央広間から椅子を持って来て、掛布団が落ちないようにつかい棒をしてやった。男の顔に赤みが出ていた。最早、危険なものはない。ベッドの下に登山靴が揃えてあり、毛糸の靴下が押しこんであった。壁にウィンドヤッケが掛けてあった。小官が整理して置いたのだ。

部屋を出ようとして、守屋は男の穿はいて来た白い靴下に眼を止めた。赤い毛糸で編みこんだ頭文字が見えたからだった。それは守屋が、椿理子つばきりこから贈られたものとあまりによく似ていた。赤い蝶が羽搏はばたきをしているように見えた。(これもなにかの偶然なんだろう)

守屋は部屋を出た。中央広間で、ひとりで寝るつもりだった。

守屋は男の寝ている部屋のドアを後ろ手で閉めながら、広間の向うの壁を見た。ピッケルが数本吊り下げてあった。その中に一丁だけ見えないものがあつた。遭難者のものである。

そのピッケルは幾分か長身の古風な型のもので、ピッケを前にして、いくらか、おじぎをした格好で入口の方を向いていた。それはいかにもバランスの取れた、前進を続けている登山者の手に持たれている自然の姿にも見えた。

ピッケの長さとブレードの幅などから見て、それが、日本で作られたものでないことは一眼で分った。(見たことのあるようなピッケルだな)

守屋はそれを手に取った。重い手応えのするピッケルだった。金属部品は黒く光っていて、十年、二十年と使いこんで出た、鉄の本当の色だった。守屋は電灯の下に持つていって更に細かく観察した。ピッケの面に、シエンクの文

字が小さく、刻みこんであつた。それはかつて見たことのあるものとあまりにもよく似たものであつた。

椿理子の家は三鷹にあつた。二階建ての洋館で、富士山の見える二階の一室が彼女の部屋になつていた。

へこのピッケル、伯父様の遺品よ

そう言つて理子の見せてくれたピッケルがシェンクのピッケルだつた。

へとつてもいい伯父様だつたわ、でも無口で淋しがり屋で、山のこと以外はあまり話したことのない伯父様だつたわ  
椿家と古くから交際していた守屋紫郎も、この山好きの理子の伯父椿武男についての記憶は、殆どなかった。ずっと前、彼が中学生だつたころ、会つたことはあるにはあつたが、椿家の応接間で、気むずかしい顔をして、パイプの煙をはいてゐる横顔しか覚えていなかった。

へあいつ変人だよと、うちの父は伯父様のこといつも言つてたわ。でも、わたしをとてても可愛がつて下さつたし、もし、俺が死んだら、このピッケルは理子にやるよと言つていたの。伯父様がスイスに行つていた時、買つて来てから、死ぬまで持つていたピッケルなのよ、これ

椿武男は数年前の冬、奥穂高で行方不明となり、遺体の発見されたのは、夏になつてからであつた。彼の山への生涯は単独行に始まつて、単独行に終つた。

彼と運命を共にしたピッケルは、シェンクの晩年の作であつた。本来このピッケルは椿武男がシェンクに注文して作らせたものではなく、シェンクが晩年の頃、山案内人のために作つたもので、その男は客を案内してウェッターホルンに登つた時、雷に打たれて死んだ。落雷を予測して、数米先の岩かげに置いたそのピッケルには落雷しなかつた。シェンクの作品としては、いささか細身のもので、シェンクの若い頃の作品のように、がっちりしたものではなく、道具としては、むしろ優美に過ぎていた。老いたシェンクの精魂をこめた芸術品としての品位を認めて椿武男が買い求めたものであつた。

椿武男が理子にやろうと遺言したのも、彼女が、将来山登りをするために言つたのでは勿論なかつた。本来の目的に使われなくとも、美しい理子と共にあることが、このピッケルにふさわしいと直感したものであらう。

守屋はそのピッケルに関心を示した。これほどのものを持つて見たいという気持は、守屋に限らず、山登りなら誰でも考えることであつた。

へすばらしいのですね

守屋は何度もそれを言つた。下さいとは勿論言えないし、富士山頂の冬期勤務の際に一度でいいから使つて見たいかと申し出ることも遠慮して、ただ機会あるごとに、この

逸品を讀めることは忘れなかった。

(あれとこれとは別物だ)

守屋はシェンクのピッケルを壁に掛けた。シェンクの作品が、何本か日本に来ていることは知っていた。理子の持っているシェンクとこれとが同一だという証拠はなにもなかった。

桐野信也がベッドを出たのは十一時に近かった。雪に埋められた窓は掘り出され、そこから青い空が見えた。風は相変らず吹いていた。中央の広間は八畳敷ぐらいの面積があり、広間を囲んで個室があった。広間の中央にストーブが燃えていた。

「どうです気分は……」

観測所員は時々声をかけたが、それ以上なにも聞こうとしなかった。ひどく忙しそうに立廻っていた。

桐野はストーブの傍の椅子に腰をかけて、頭の中のことを整理しようとした。太郎坊を出発した時のことは覚えていた。新雪の上にまぶしく太陽が輝いていた。三合の小屋の上でアイゼンをつけた。その頃から風が出たが、頂上はよく見えた。五合目あたりから吹雪になり、下ることも登ることも困難になった。そこで桐野は山を登る場合と、下

る場合の危険性を比較した。富士山の麓は広い、吹雪の中に道を失ったら最後、太郎坊にたどりつくことは、絶望と見るよりなかった。頂上に向ってつめていけば、そこには必ず観測所がある。風は強いが、山登りにかけて、自信はあった。装備も完全だった。桐野は立ったまま、チーズとチョコレートを食べた。

そこまでははつきり彼の記憶に残っていた。食べてから腕時計を見ると四時を過ぎていた。その時の時刻がはつきり焼きついたまま、頭の中で停止した。それから時間の経過はなかった。唯前進していることだけを意識していた。どこをどう歩いたかの記憶もさだかではなかった。重く足につきまとう雪をふみながら、登っているのではなく山を下っているのではないかと考えたこともあったが、雪が無いところになると、足にひびく固い感覚で氷壁であること意識の底につかまえて、ピッケルを立てた。

幻聴はその頃から始まった。女の笑い声だった。いかにも楽しくてたまらないというふうな笑い声だった。登っても登っても女は彼よりも高位の場所に笑っていた。女が椿理子であることは、その笑い方で分っていた。彼は笑いに引かれて、前進を続けていた。観測所に到着することが目的ではなくなっていた。富士山頂観測所を訪問して、理子の言う、すばらしい科学者たちに会って見ることなど、ど

うでもよくなっていた。まして、守屋紫郎という人物が、どのような男であり、その男の何処に理子が牽かれてゐるかを確かめたいなどという、登山の動機はとくに彼の心から失われていた。

それからはずっと空白だった。気がついた時には寝台に寝ていたのだ。

桐野は後頭部に痛みを感じた。寝不足の時の痛みと似ていた。彼は、手を頭に上げた。

「頭痛ですか、それは気圧のせいですよ」

髭面の男がそう言って笑いかけた。山賊のような顔をした男だったが、きれいな眼をしていた。齒が白く光っていた。年齢は分らない。

「小宮君、昼食にしようじゃないか」

その男は手に小さいノートを持っていた。ノートの間に鉛筆がはさんであつた。

(この男が、守屋紫郎だろうか)

桐野は、まだ観測所員の誰にも助けられた礼は言っていないことを気にしていた。桐野は椅子を立とうとした。

「おうい、小宮君、守屋君はどこかね」

髭の男は廊下の方へ向つて声をかけた。桐野は機会を失つて椅子に腰を下ろした。

「ああ、守屋さんけえ、風力塔で氷を落していますよ」

そう言いながら出て来た小宮という男は、六尺近い背丈をした、たくましい男であつた。

「もう起きて大丈夫かね……」

小宮はそう桐野に呼びかけて、にっと笑つた。笑うと、鼻の上に皺が寄つた。図体は大きい、人の好きが顔中にあふれていた。

ドアを明けて、広間に入つて来た男は、手袋をはずし防寒帽を取つてから、ストーブに近づいて来た。きりつと引締つた、冷たい程整つた顔をしていた。

「窪沢さん、あの風速計はもう取りかえなきゃ駄目ですね……」

守屋は髭の顔にそういつてから、坐つてゐる桐野に眼を投じた。が、なにも言わなかつた。

「お客さん……あなたを助けたのは、守屋さんですよ……」

黙つたまま見詰めあつてゐる二人の間に小宮が割り込んだ。遭難者をお客さんと呼ぶのも別にへんではなかつた。桐野は椅子から立上つて礼を言つた。

「どうしてまあ、あの吹雪の中を……」

小宮は桐野に話のきつかけを与えた。

「冬にしては珍しい、天氣の急変でしたね、きつと、あの暴風雪に四合目か五合目で出つくわしたんですね……」

窪沢が、腰を下ろして言つた。桐野をいたわつてゐる言

葉付きであつた。

「すみませんでした……」

桐野は頭を下げた。乱暴きわまる登山をして、観測所に迷惑をかけたことに対する全般的な詫び言葉であつた。それ以上、道中のことは聞かれても言わなかつた。無我夢中でしたという言葉で、その状況を説明した。

「守屋さんが起きていたからよかつたんですね」

小宮はそう言い残して食卓の準備に掛つた。

「シェンクのピッケルをお持ちなんです」

守屋は、ずっと頭に持ちつづけていた疑問をそのまま前に出した。

「そうです、シェンクです、シェンクの晩年の作だそうですね」

桐野は守屋の顔を真直ぐ見て答えた。思ったとおり守屋の顔にわずかながら動揺が見えた。だがまだ、ピッケルが、理子の物だとは気がついては居ない顔だつた。

へこのピッケルを守屋さんに見せたら、とても欲しそうな顔をしていたわ」

理子が言つた言葉を桐野は思い出してゐた。その相手は前に居るが、自分と理子のことについては何も知らない。危険を冒してまで、ここへやってこようとした自分の気持ちなど知る筈もない。

「シェンクって、スイスのシェンクのピッケルなのかい」  
窪沢が驚いたように、壁を見た。ピッケルはなかつた。

明け方、小宮が、桐野の持物を全部まとめて、守屋の私室つまり、桐野の臨時宿泊所に運び込んだのである。

桐野の食欲は全然なかつた。ちよつと箸をつけただけだったが、お茶は何杯も飲んだ。これからどうしたらいいのか、桐野の頭の中は、まとまつたものがなかつた。アイゼンの片方とルックザックを失つたことは、登山家として大変な失敗だつた。ルックザックはなくても歩けるが、アイゼンのないかぎり、冬富士から下ることは出来なかつた。降雪の後を襲つた風は、綺麗に雪を吹き払つて、つるつるの蒼氷の壁となつていることも、彼の常識の中で、危険信号を送つてゐた。

「山の方はそうとうやっておられるようですね」

窪沢は桐野をなんとかして、話の渦中に引きこもつるように見えた。冬期富士山頂観測所を訪れる登山者は数こそ少ないが、それぞれが山にかけての経験の深い者が多かつた。誘ひ水をかけさえすれば、一日でも二日でも山の話を、自分では自慢だと意識しないで話すのが通例だつた。ところが、桐野は問いかけられた事項に対して、イエスカノウかを答える他、余計なことはいわなかつた。

それが窪沢には、敗軍の将、兵を語らずの一種の美德に

も見えて、それ以上は山のことを聞かなかった。小宮は桐野が黙っているのは、疲労しているからだと解釈した。守屋紫郎は全然違ったところから桐野を見ていた。

守屋は、風力塔から降りて来た時、自分に向けて来た桐野の眼をただの眼だとは思わなかった。自分を守屋紫郎と知っている眼に見えた。黙って坐っている桐野信也の向うに椿理子の姿が見えた。シエンクのピッケル、毛糸の靴下、理子、桐野、四つの要素で守屋は一つの方程式を組立てようとした。

午後になって、小宮が、ルックザックを八合目の岩の陰から探し出して来た。

「風に飛ばされねえように、かくして置いたのけえ……」小宮はそう言って、重いルックザックを桐野の前に置いた。桐野にはそういう記憶は全くなかった。理子の幻聴に襲われながら登っている途中、一度だけ、不思議に頭がはつきりした時があった。その時には既にルックザックは背にはなかった。ルックザックの中身は、頂上観測所を慰問する食糧が主なものだった。

「守屋さんたちは想像も及ばないような苦勞をしているのよ」

理子が、もっともらしく首をかしげて言った時に、桐野は、

（ではひとつ、なにか持ってその大変な仕事を拝見に行こうじゃないか）

そんな氣持になった。冬の富士登山が楽でないことは知っていたが、理子がいうほど大変なことだとは思っていなかった。だから、冬富士はまだやってはなかったのだ。その説明を理子にしたところで理子には分るものではなかった。

「登って見ようかな」

そう理子に言う前に桐野の心は決っていた。

「登るって富士山へ？ あなたが、危険だわ、この次、守屋さんの登る時、一緒に連れてって貰ったら……」

それが桐野には侮辱に聞えた。守屋の山の経験は富士山しかない、俺は富士山以外の多くの山を知っている。

「冗談じゃあないですよ、理子さん、ひとりでちゃんと登って来ますよ」

「強力をつけずにひとりで……」

驚いて、眼を見張る理子の顔は美しかったが、桐野には面白くなかった。彼は理子の部屋の窓から見える秀麗な富士山へ怒りの眼を向けた。

「ほんとに行くんだったら、わたしの大切なピッケルを貸して上げるわ」

そういう理子の顔に桐野は、

「無事にひとりで行って来たら、このピッケルを僕にくれ



ますか」

と難題をかけた。

へだめよ、貸して上げるだけよ、これを上げる人はまだ決めてないの……」

理子の深い笑窪の中に、かくされたものが、桐野を軽く突放した。

「きつとなにもかも捨てたくなっていたんだね、その時は……」

桐野はそう言いながら、小宮の拾って来たルックザックの口を開いた。山頂での四十日に一度の交替期でさえも見られないものが、次々とルックザックから現われた。洋菓子、洋酒、果物、すべて高級の物ばかりであった。凍結を防ぐために、マスクメロンは綿に包んで、箱の中に入っていた。

「どうぞ、つまらぬものですが……」

桐野はそれ等の品物を前に押し出しながら、今となったら本当につまらないものだと思った。天気さえよかったら正面から観測所の門を叩いて、守屋紫郎を呼んで、椿理子の紹介で頂上慰問にやって来たのだと名乗りを上げる。ルックザックの口を開いて、土産だと差出す。それから煙草に火をつけてゆっくり守屋の顔を見てやるのだ。だが、今

は違っていた。桐野は遭難者として保護された登山者でしかなかった。

「わざわざ用意して来られたんですか」

窪沢は、観測所始まって以来の贈り物を、不審の眼を持って受取った。未だ一度も、土産物を持って訪れた登山者はなかった。

頂上に行けば観測所があるからなんとかなるという気持で、食糧さえ持って来ない者もある。登山者は下界の人としての珍しさで歓迎される以外では、山頂観測所の食糧を食べて下山する、浮浪者の類いでしかなかった。

「桐野さん、あなたはなにか私達に用があつて登って来たのでは……」

窪沢の質問に桐野はいささかあわてて、

「なんでもないんです、ただの思いつきなんですから、気にしないで下さい」

桐野は横を向いた。守屋が自分と土産物を等分に較べながら、なにを想像しているか分るような気がした。桐野はストープにかけた石油罐の中で溶ける霧水の塊に眼をすえたまま動かなかった。

守屋紫郎は、自分の部屋のルックザックの中から理子か